桃李の下で、君を待つ

夕凪　遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
桃李の下で、君を待つ

【Ｎコード】
Ｎ３１８６Ｙ

【作者名】
夕凪　遼

【あらすじ】
――すべての事象には、始まりと終わりがある。
それは、始まりがあるから終わりがあるのか、それとも終わりがあるから始まりがあるのか。
これは、終わりしか知らない神と始まりしか知らない神が綴りゆく、終わりから始まる物語。

君が望む永遠、僕が生きる刹那

いちばんはじめの始まり――そこには混沌と、唯一つの生命が存在していました。
全ての源たる混沌の中で、生命はある時、己が何者であるのか疑問を抱き、問うことにしました。
しかし唯一であるが故、その疑問に答えるものはいません。
その事に気づいた生命は、それならばと己が身を二つに分け、答えるものを創り出しました。
『他』を得た生命はそこで初めて己を知り、分かたれたものと共に大いに語らい始めます。
互いに問いかけ、互いに答え……やがてそれは世を創り、世は界を育みました。
こうして『世界』は、混沌の中にその存在を現したのです。
しかし出来上がった世界は理を持っておらず、ひどく不安定な存在でした。
ともすれば混沌に飲まれそうになる世界を、彼らは常に気にかけ、何とか出来ないものかと思案していた――その最中（さなか）。
自分達が混沌の中で存在していることに気づいた彼らは、自らの分身を世界に与え、それらに世界を維持する役目を負わせました。
するとどうでしょう。
世界は瞬く間にその容貌を確立させ、確固たる存在となった世界を彼らはとても慈しみました。
けれど何かが足りません。
ある時、彼らは思いつきました――生命に『終わり』と『始まり』を与えてみよう、と。
彼らに与えられた『終わり』と『始まり』によって生命は次なる生命を生み、巡り始めたそれは理を紡ぎだし混沌をはねのける力となりました。

そして彼らもまた世界へ降り、自ら役目を負いました。
『始まり』――すなわち創造を負ったのは赤い瞳のカーネリア
『終わり』――すなわち破壊を負ったのは碧い瞳のローライト
斯くして時は穏やかに、緩やかに流れていきました。
その中で、彼らがお互いの背負うものに興味を抱いていったのは、必然とも言える流れでした。
何故ならそれは、自らが決して持つことのできないものだから。
かつてのように己の内にある答えだけでは、語り合うことは叶いません。
それは彼らが繋がれないということ。
ひとつだった彼らは、いつの間にかひとつ同士となっていたことに気がつき、やがてお互いを求めあうようになりました。
けれど、カーネリアが創造を示せば、ローライトはそれを破壊してしまい、ローライトが破壊したものを、カーネリアは創造することしかできません。
お互いを知ろうとすればするほど、分からないことが増えていきます。
世界を支える柱である彼らの交わりは、周囲を覆う混沌との境界線を曖昧にさせ、時には奪い合うように繰り返される創造と破壊は、世界の構造さえも変えてしまいました。
当然、変化したことで役目を失った生命は消えていき、荒んだ世界を見て彼らはようやく知りました。
自分達は求めあってはいけないのだと。
しかしもう一度世界を創ることはできません。
そこで彼らは、生き残った力ある生命に再び役目を与え、世界を『元の姿に戻した』のです。
そうして消えていった生命は甦りましたが、もう役目を負えるだけの力は残っておらず、そこに『力ある者』と『力なき者』が生まれました。
違いすぎる両者が共に暮らせるはずもなく、力ある者はなき者を脅(おびや)

かし、力なき者はある者を羨み、妬みました。
それは世界の調和を乱し、歪みをもたらしました。
あまりにもたくさんの力なき生命を憂えたカーネリアは、同じくあまりにも歪んだ世界を嘆いたローライトと共に、それらに『役目』ではなくある役割を負わせました。
ローライトの姿に似せた生命には『男』という役割を。
カーネリアの姿に似せた生命には『女』という役割を。
両者が交わることで次なる生命を生むという仕組みを創りました。
―自分達が遂げられなかった想いを託すように―
そして彼らは最後に『言葉』を授けました。
自分達と同じ過ちを繰り返させないために、違うもの同士が解り合えるように。
斯くして力なき者と力ある者の暮らす世界は隔てられ、両者を繋ぐ扉はかたく、かたく閉ざされました。
ただ、平和を願って。
すべてを終えたあと、カーネリアは片割れに言いました。
『愛している』と。
ローライトも片割れに言いました。
『私も愛している』と。
カーネリアは涙を流し、白銀に煌めく剣を取りました。
『私はこの愛を以てあなたを殺し、世界を創造する。これは私の罪であり、あなたへの罰だ』
ローライトは薄く笑みました。碧く透明な瞳に柔らかな光を湛えて。
『それでいい。私はあなたの罪を許しはしないし、罰を受け入れはしない。この愛を以て永遠に壊し続けよう……あなたが創造する限り。それが私の戒めだ』
お互いの心を独占できるのは、永遠にお互いだけなのだと、それは誓い合っているようでした。
カーネリアの剣が片割れの心の臓を深く貫き、白銀の刃が深紅に染まっても、彼らは悲しくはありませんでした。

何故ならこれはさよならではなく、また会うための約束だからです。
抜け殻となった片割れの体をきつく抱きしめ、カーネリアは最期の愛を込めて口づけを落としました。
すると、ローライトの抜け殻は目を開け、起き上がりました。
カーネリアは驚きましたが、二度も刺し貫くのは忍びなく思ったのか、生き返ったそれを新たな種としてつがいと共に地上に放ちました。
ただ、安寧であれ、と。
万感のその祈りを結び、旋律は重なりやがて――
やがてそれは、物語を紡ぎ始めました……

君が望む永遠、僕が生きる刹那（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます。

第一節

約束された『終わり』は迎えられた。
そして――幾度目かの『始まり』が訪れる……

とても、とても静かな夜だった。
月光の差し込む執務室はいつにも増して静謐に満たされ、書き物をするペンの滑る音だけがやけに大きく響いている。
その静寂の中で、窓近くの壁に背を預けた男は何かに気づいたように面を上げ、視線を窓の外に向けた。
その瞳が、驚きに見開かれる。
「…ユキ、見てみろ」
ペンを走らせる音が止み、ユキと呼ばれたもう一人の男は書類から目を離してそちらを向いた。
そして、空を見上げたまま険しい表情を崩そうとしない男の様子から、ただならぬものを感じ取った彼は、執務机から視線をたどり、黄昏色の瞳を細めた。
「月が、赤く染まっていく……」
そう、それは『終わり』の『始まり』を告げる凶兆。無慈悲なる神の託宣――
「禍月(まがつき)だ。来るぞ」
――心を引き裂くような　慟哭が木霊した。

第二節

染まりゆく月は見る間に滴りそうなほどの赤に色を変え、辺りを不気味に照らし出していた。
「始まってしまったか……」
空を見上げたまま、男は事実を淡々と述べるような口調で言った。
その言葉にユキは敢えて何が、とは聞かなかった。禍月を呼び寄せるのは唯一、古よりの血族のみ。それが示すものを知らないほど、彼の立場は甘いものではなかったから。
「『始まり』は誰にも止められないさ、彼の破神でさえもね。面白くない話だ」
口角を吊り上げただけの挑発的な表情は、言葉とは裏腹にどこか楽しげでもある。
男は軽くため息をつくと、赤い月から逸らすように目を伏せた。
「すべては予言通り。神々の綴る筋書きに逸脱は許されない、か」
嘲りを含んだ声に彼もまた呼応するように嗤った。
「僕たちの行動も予言のうちだって？はは、萎えるねぇ」
二人とも、それぞれの言葉が諦めから来るものではないことを知っている。互いの言葉に含まれる言外の意味が分かるくらいに彼らの付き合いは長いのだ。
そして言ったところで行動が変わるわけもなく、為すべきことはまだ山のようにある。
「けれど、僕は抗ってみせるよ。誰も悲しまない世界のために」
言って、彼は自嘲した。自分の喜びが、誰かの悲しみを糧に成り立つこの世界で、誰も悲しまない世界など作れるはずがないのだから。だからこれは、世界や顔も知らぬ他人のために言った言葉ではなかった。
理想と称した空想でもない。
これは、彼の独善（エゴ）だ。

大切な人の悲しむ顔を見たくない彼の、我儘にすぎない。
故にいくら罵られようと、恨まれようと、彼は言い訳しない。したくもなかった。
自らの行いを言葉で汚すような真似が、彼は何よりも嫌いだったから。
「……お前は馬鹿だ」
不意に、ぽつりと窓近くの男が呟いた。心なしか眼差しに翳りのような色が滲んでいる。
その眼差しに彼は困ったように笑い、大袈裟に肩を竦めてみせた。
「馬鹿で結構さ」
愉快そうに表情を歪める彼に男はため息をつく。その意味さえ彼には理解できるようで、むっとした表情で小さく「冗談だよ」と言った。
「お人好しもそこまでくるといっそ、清々しい」
男は微かに、本当に微かに表情を変えた。
それはまるで仕方のない奴だ、と言っているようで、彼の中の罪悪感が大きくなる。
無愛想で不器用で、誰よりも優しいこの親友は、すべてを受け入れ、許し、共にいると誓った。その言葉を決して裏切らない。
裏切らないと分かっているからこそ。
「……君だって人のこと言えないだろ」
そう、言うのがやっとだった。
「……」
「……」
二人は同時に吹き出し、盛大に笑った。立場も柵もなかったかつてのように、笑い合った。
普段ならできるはずもない軽口をこうして叩きあえるのも、もうすぐ終わってしまうことを惜しんでいるようで、それがいっそう可笑しくて。
ひとしきり笑ったところで、ユキが話題を変えるようにわざとらし

く息をついた。
「さて、そろそろ始めようか。準備は整っているかい？」
おもむろに席を立つと、彼は隣室へ繋がる扉へ向かった。
「いつでも」
その答えに満足したのか、笑みがいっそう深まる。
「では見せてやろうじゃないか、世を創り給いし神々に」
これが、僕らの悪足掻き（シナリオ）だ。

扉の奥へ消えていくユキを見送り、男は――志狼は窓の外へ視線を戻した。

第二節（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます。
ご指摘などありましたらお願いします。

第三節

「ラキア」
声をかけると、微かに反応する気配が伝わった。
明かりの灯らない部屋は暗かったが、彼の瞳はその姿を捉え、闇の中を迷いなく歩いていく。
声をかけられたその人影は、幼子をあやしながら静かに振り向いた。
「あら、もう時間？」
少し間延びした返答に彼は思わず笑ってしまい、それから彼女の腕で眠る愛し子に目を移した。
「時が経つのは早い。紗耶は……よく眠っているね」
彼は幼子の柔らかな髪を撫で、囁くように言う。
「今眠ったところよ」
ふ、と二人は笑いあう。しかし、その笑みもほんの一瞬で彼の表情から消えてしまった。
「術式が完成した。あとは発動を待つだけだ」
決然と、それは裁断を下すような宣言だった。
彼女は彼を見たまま、ただ続きを待つ。
「怖い思いを、させてしまうね……」
消え入りそうなほど小さなそれは、どちらに言った言葉なのか。
撫でる手が離れ、力なく下げられる。ラキアは彼のものよりも深い宵闇色の瞳に柔和な色を滲ませ、幼子を起こさないように立ち上がると彼をまっすぐに見上げた。
「大丈夫よ、心配ないわ。貴方が考えて選び取った可能性（みらい）ですもの」
そう言ってにっこりと笑う彼女の瞳はひたすらに優しく、強い意思を湛えていて。彼は拳を強く握ると、幼子ごとラキアを抱きしめた。
「僕は情けないなぁ……」
「今に始まったことではないわ」
「本当に情けがないな……いいけど。ラキア、必ず守るよ」

より深く抱きしめようと腕を伸ばしたその瞬間――

「！！」

背筋に寒気が走った。ユキは動きを止め、通路に目を向ける。不自然に止まった彼を見上げた彼女が怪訝そうな口調で尋ねた。

「誰かいるの……？」

「早く。こっちに」

部屋の外に目を向けたまま言い放ち、その口調から察した彼女は幼子を抱く腕に僅かに力を込めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3186y/

桃李の下で、君を待つ

2011年12月7日23時47分発行